

4. ^{ひこさんおど}彦山踊りにみる歴史的風致

(1) はじめに

彦山踊りは、^{ひこさん}英彦山麓の各集落で踊られる盆踊りである。笛・太鼓・三味線の鳴り物の音頭に合わせ、踊り手たちが輪になって踊るもので、古くから先人たちによって、踊り伝え語り伝えて今日まで継承されている。

^{ひこさんじんぐう}英彦山神宮の参道においても、お盆の時期に複数の箇所では彦山踊りが踊られ、地元住民に帰省した家族も加わり、夏の風物詩として賑やかな情景が広がっている。



彦山踊りの様子



町溜での彦山踊り

(2) 歴史的風致を形成する建造物

彦山踊りは、^{ほうおんじあと}英彦山神宮参道において^{せいだまり}報恩寺跡、^{まちだまり}勢溜、町溜を中心として踊られている。

報恩寺は英彦山の菩提寺で、得度山伏であっても葬儀は報恩寺導師によって執り行われた。よって報恩寺は英彦山の祖霊を祀る大切な場所であった。

報恩寺の創建は定かではないが、座主相有が正徳5年（1715）に編纂し、英彦山景勝地を詠んだ『彦山勝景詩集』（正徳5年（1715））には十二景の内に「報恩晩鐘」として夕暮れに響く報恩寺梵鐘の音が英彦山の情景に挙げられている。また、『明治初年坊中屋敷図』（明治初年）にも報恩寺として記されていることから、明治時代初期までは存続していたこと

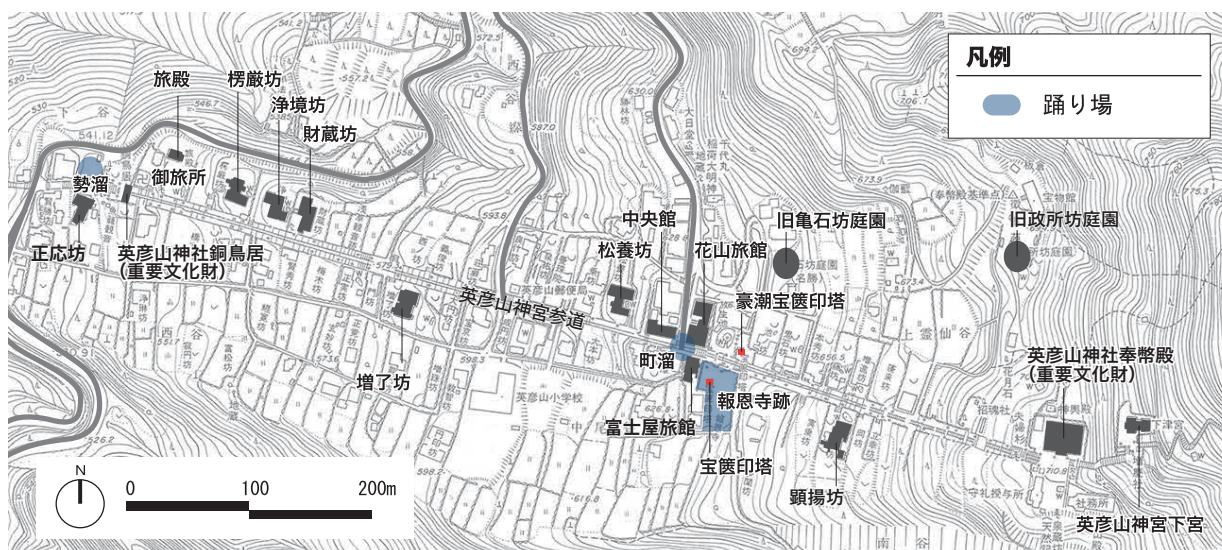


図 彦山踊りの踊られる場所と建造物の位置

が分かり、山伏の離山とともに廃絶に至った。

報恩寺前には祖霊を供養するために豪潮律師^{ごうちょうりっし}が建立した巨大な宝篋印塔^{ほうきょういんとう}と報恩寺境内地にも宝篋印塔1基が立っている。

勢溜^{ひこさんじんぐうかねのとりい}は英彦山神宮銅鳥居前の大広場で、かつて英彦山詣での群衆で賑わった場所である。石段の傍らには「下乗石」^{げじょういし}が立ち、ここで馬、駕籠^{かご}を降り、身支度を正して鳥居を潜って参詣した。勢溜は彦山門口として重要であり、門前供養として古来より彦山踊りが踊られている。

富士屋旅館^{ふじやりょかん}、花山旅館^{はなやまりょかん}前の町溜は、旅館や土産物屋が立ち並び、参詣者で最も賑わった場所で、神幸祭神輿休めの場所でもある。ここで行われる彦山踊りでは泊り客も参加して大きな輪をつくり賑わいを見せる。



報恩寺跡



下乗石



勢溜



町溜

1) 豪潮律師宝篋印塔^{ごうちょうりっし ほうきょういんとう}

豪潮律師宝篋印塔は、豪潮律師によって英彦山報恩寺前に建立された、高さ8mの宝篋印塔（仏塔）である。刻銘から、文化14年（1817）のものである。

豪潮律師は中国密教と戒律等の伝授を受け、御霊の供養と飢饉救済を目的とした仏塔の建立に努め、大小あわせて約八万四千の仏塔を建立したと伝えられる。英彦山に残るこの仏塔は最大規模のものである。

この仏塔は明治維新の廃仏毀釈の難に遭い、取り壊される間際に塔身の宝篋印陀羅尼を表すシッチリア梵字^{はいぶつ きしゃく}を削り、豊後日田咸宜園^{ぶんご だに かんぎえん}に学んだ高僧平野五岳^{ひらの ごがく}が「献燈」の文字を彫って灯籠に改変して、損壊の難を逃れた。



豪潮律師宝篋印塔

ほうおん じ あとほうきょういんとう
2) 報恩寺跡宝篋印塔

報恩寺境内地にある宝篋印塔（仏塔）は、英彦山で唯一完全な形を残すもので、高さは3.5m余りで梵字なども完存するものである。台座には文化5年（1808）に嘉穂郡（現・飯塚市周辺）の有志が奉納したことが刻まれている。



報恩寺跡宝篋印塔

ふ じ や りょ かん
3) 富士屋旅館

富士屋旅館は町溜に面して建つ建築物であり、参道に面して土産物店を構えている。かつては旅館としても利用されていた。『明治初年坊中屋敷図』（明治初年）を見ると、富士屋旅館は油屋の前の「地藏堂」跡にあり、山伏坊家から宿屋に転じた家柄である。

建築物は木造二階建、入母屋造であり、2階の客間は参道に面し、広い開口が設けられている。

炭鉱景気に湧いて筑豊・北九州などから多くの泊客があり、彦山踊りで賑わう昭和10年（1935）頃の写真に花山旅館とともに写り、昭和初期までには宿屋として営まれていたことがわかる。



富士屋旅館

は な や ま り ょ かん
4) 花山旅館

花山旅館は町溜に面して建つ建築物であり、参道に面して土産物店を構えている。かつては旅館としても利用されていた。『明治初年坊中屋敷図』（明治初年）を見ると、花山旅館の場所にはかつて両替所である「油屋」があり、富士家旅館と同様に山伏坊家から宿屋に転じた家柄である。

建築物は木造二階建、入母屋造であり、2階の客間は参道に面し、広い開口が設けられている。

炭鉱景気に湧いて筑豊・北九州などから多くの泊客があり、彦山踊りで賑わう昭和10年（1935）頃の写真に富士屋旅館とともに写り、昭和初期までには宿屋として営まれていたことがわかる。



花山旅館

表 その他の歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

	建造物名	掲載ページ
1	英彦山神宮銅鳥居	2-11
2	英彦山神宮参道	2-12
3	旅殿	2-26
4	松養坊	2-26
5	財蔵坊	2-26
6	浄境坊	2-27
7	楞嚴坊	2-27
8	増了坊	2-27
9	正応坊	2-28

(3) 歴史的風致を形成する活動

1) 彦山踊り

彦山踊りの起源は種々の説があり、ひとつは、元弘3年(1333)に^{じょゆうほうしんのう}助有法親王が座主として下向したときに始められたと言い伝えられている。そのほか、飛騨高山の^{きつそう}吉左右踊りを起源とする説がある。飛騨代官^{はせがわただか}長谷川忠崇が著した『飛州志』(延享年間(1744～1748))によれば、文禄年中^{とよとみひでよし}豊臣秀吉が朝鮮出兵の折、飛騨国主の^{かなもりながちか}金森長近が^{ひぜんなごや}肥前名護屋城に出陣し、国元へ戦勝の吉報が届くごとに城下の臣民が祝い踊ったといわれる。吉左右踊りにある「しんとろとろと眠る目の愛しさ とりおけ 芋桶」「今宵も鹿の子 ^{すげがき}あすの夜も鹿の子 めしかえてござれ」という歌詞が彦山踊りにもあり、また衣装も菅笠を被るなど同じ意匠がみられる。

『^{たがわちほう}田川地方 ^{みんよう}民謡・^{どうようけんきゅうしゅう}童謡研究集』(平成2年(1990))によると、昭和3年(1928)、炭坑節の撰者として知られる^{おのよし}小野芳香は彦山踊りの譜面を収録しており、この頃には現在の彦山踊りの型ができていることがわかる。また、昭和10年(1935)頃の古写真から、英彦山神宮銅鳥居の下にある^{まつざか}勢溜や、^{ぎやうおど}旅館や土産物屋が立ち並ぶ前にある^{かみおちあい}町溜で彦山踊りが踊られていることがわかる。

『^{ひこさんみんぞくしりょうきんきゅうよびちようさ}英彦山民俗資料緊急予備調査』(昭和45年(1970))によると、彦山踊りは江戸期～大正期までは主に盆会や祝祭事で踊られ、8月15日、16日頃を中心に、その前後に行われる各谷の祭礼でも踊られ、下谷弁天講、英彦山町大日講、西谷観音講と地蔵講、上谷伽藍講などの座の終わりに踊られていた。

そのほか、彦山踊りは別名「^{まつざか}松坂公卿踊り」とも呼ばれ、英彦山山麓では^{かみおちあい}上落合地区の十日観音講など「^{まつざか}松坂踊り」として盆会に踊られている。



英彦山神宮銅鳥居の下にある勢溜での彦山踊りの様子(昭和10年(1935)頃)



町溜での彦山踊りの様子(昭和10年(1935)頃)
富士家旅館、花山旅館が写る



飛騨高山の高山踊り(吉左右踊り)



上落合地区十日観音(8月10日)で踊られる松坂踊り

現在の彦山踊りは、5月の英彦山山開き前夜祭や報恩寺跡で行われる8月14日の英彦山神宮の祖霊祭の後に踊られている。祖霊祭では午後8時に新盆の祖霊を祀る祭典の後、遠方より帰省した縁者や英彦山地区住民総出で彦山踊りが始まる。



祖霊祭



祖霊祭彦山踊り

彦山踊りでは神霊の依代とするため、踊りの中心となる場所に4本の笹竹を立て、しめ縄を張り巡らす。しめ縄には紙垂しでを下げて神籬ひもろぎを作る。その神籬の中に傘を立て笛・太鼓・三味線の鳴り物が音頭をとる。



広場の中心に神籬を作る様子



しめ縄に紙垂を付ける様子

口説き手は御幣の付いた2m余りの竹笹を持って歌う。口説き手が交代するときは、竹笹を渡して交代する。「ヨーイヤー、ヨーイヤー、ヨーイヤーサー」「一つや二つ エイコショ、ハ、ヨイトコソーラ、三つや四つなる幼子が父母恋し、サハーリャアリャア」と歌い出されると踊り手は右回りに踊りはじめる。踊り手の衣装が特徴的で着物を着て御幣の付いた菅笠を被っている。所作は幽玄緩やかであり、足の運びは摺足すりあしで能の「序の舞」八拍子に合うことから近江系おうみの能楽などの影響が指摘されている。(昭和49年(1974)第14回全日本民謡指導者講習会)

踊りは緩やかであるので、前の人について踊ると子供でも踊ることができ、祖霊祭での彦山踊りでは二重三重の輪が広がる。

歌詞は72首もあり、かつては夜を通して踊られた。戒律の厳しい英彦山での生活では、この踊りが唯一の娯楽と考えられており、老若男女が老杉木立から洩れる月光を浴びながら、夜通し踊り明かしたといわれ、井上紫城による絵図『彦山踊り』(昭和23年(1943)、英彦山神宮所蔵)にもその風流な様子が描かれている。

2番以降の歌詞には「妹山背山中を流るる吉野川清姫恋し」、「鬼界ヶ島にいとし俊寛唯一人東恋し」、「石童丸は父を訪ねて高野山会わずに帰る」などがある。清姫は能「道成寺」、

俊寛^{しゅんかん}は謡曲「俊寛」、石童丸^{いしどうまる}は謡曲「茹萱^{かるかや}」を題材とする歌詞であり、他にも「大津」、「三井寺」、「清水寺」など京都、近江に関連する歌詞が多くあり、近江系能楽と言われる由縁とも合致している。また、全体的に七七調で後半7首は詩形が違って七五調にしている。これは、「カン音頭（かつては「男踊り」ともいわれた）」と呼ばれるものであり、調子を変えたり、踊り方も変え、踊りが乱れたときに引き締めを行っている。祖霊祭が終わると、いくつかの新盆の家に出向いて、踊りを踊っている。



笹竹を持って歌う口説き方



神籬の中で音頭をとる三味線方



現在の彦山踊りの様子（勢溜）



菅笠・着物の彦山踊りの衣装



新盆の彦山踊りの様子（町溜）



図 井上紫城筆 彦山踊り
（昭和23年（1948）、英彦山神宮所蔵）

(4) まとめ

盆会の8月14日、この日ばかりは遠く山を離れた子や孫たちも帰省し、祖霊とともに山懷に抱かれる。月明かりに照らされた祖霊祭の行われる報恩寺跡境内には、久しぶりに子供たちのはしゃぐ声が響き、かつての賑わいが思い返される。町溜、勢溜では大きな輪をつくり、三味線や笛、太鼓の音頭、口説き手の声が闇夜に静かに溶け込み、菅笠姿の踊り手のしなやかな足運びは、深山にも「みやこ情緒」が感じられ、歴史的風致を形成している。

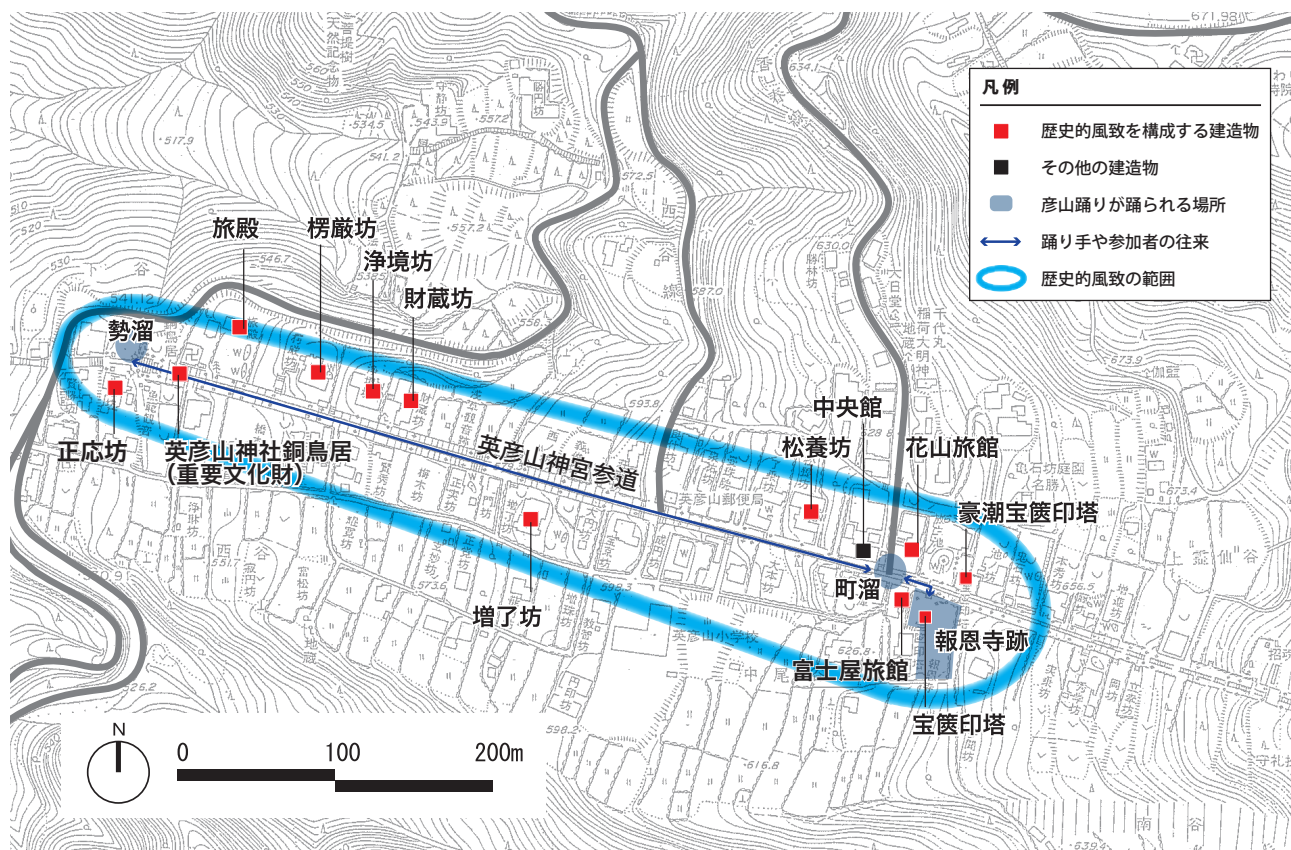


図 彦山踊りにみる歴史的風致の範囲